

トップ直撃インタビュー

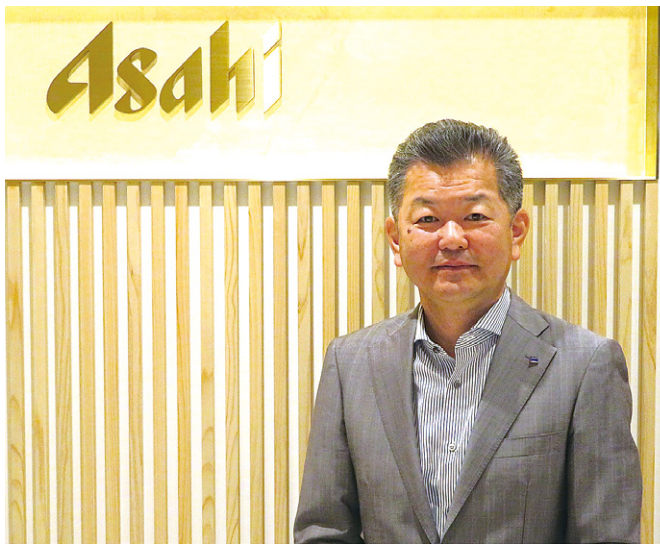
アサヒグループジャパン 濱田賢司 代表取締役社長兼CEO

国内事業、上期プラスが確実視

1~5月累計で酒類、飲料、食品の各事業とも前年をクリアし、上期としてもプラスが確実視されているアサヒグループホールディングスの国内事業。「One・Asahi」、唯一無二の酒類食品企業の実現のための次のステージへ歩みを進める」とするアサヒグループジャパンの濱田賢司代表取締役社長兼CEO(写真)に近況を聞いた。

1~5月の国内事業実績は、ビール類101%、洋酒112%、RTD111%、アルコールテイスト飲料123%。本紙推定では酒類計もプラスとなっている(いずれも金額)。また、飲料事業(アサヒ飲料)もトータルで101%(数量)、食品事業(アサヒグループ食品)は103%(金額)。上期の国内事業がプラスで折り返す公算が高いことを裏付ける数値だ。

「2026年の酒税改正までに、ビールでの圧勝を掲げている」とする酒類事業について濱田社長は、「スーパードライを中心、アサヒ生ビール(通称マルエフ)やスーパードライ生ジョッキ缶、生ジョッキ缶のプレミアムバージョンであるアサヒ食彩、アルコール度数3・5%のスーパードライドライクリスタルなど、数々の新提案を積み重ねてきた。直近こそ、他社新製品の猛攻で伸びは鈍化しているが、試飲を含めたお客様接点の拡大に継続して注力し、ビールで圧倒的な地位を確立することに向かっている。また、生ジョッキ缶同様に缶蓋が全開するRTD・未来のレモンサワーや、4月に発売したGINONなどで新提案を進めるRTDも、GINONが目標を上回るペースで拡大するなど、堅調に伸長している。90周年を迎えたニッカウヰスキーは、次の100年に向けた投資で、ジャパニーズプレミアムウヰスキーの地位を盤石にする



「他業種とのコラボも始

取り組みを進めている」とする。実際、「スーパードライ」ブランド計(「ドライクリスタル」を含む)の1~5月販売数量は前年比106%。2ヶ月伸ばしたRTDでは、4月2日に全国発売した「GINON」が累計約125万箱と、年間販売目標の300万箱の4割を超えた(250ml換算)。

また、コロナ禍の真只中、2020年に始めた「スマドリ」は将来、アサヒビールの第二の柱に育てるべく取り組んでいるが、「その認知率が35%まで上昇するなど、一歩一歩だが着実に前進している。アルコール飲料を飲まない人、飲めない人が合計で500万人。若い人たちを見ると、それが事実なのだ実感し、この取り組みがいかに重要かを改めて痛感している(濱田社長)として、ノンアルの「アサヒゼロ」、微アルの「ピザリー」そして「ドライゼロ」などを核に、この世界をもっと探求してく方針だ。濱田社長も、

「1000万箱を掲げて発売した、微醺酵素茶葉を一部使用した緑茶・アサヒ颯は、独自の世界観で定番として成長することを目指している。炭酸飲料は、140年ブランドの三ツ矢、その地位をより盤石にしているウヰルキンソンともに好調だ。特にウヰルキンソンは、都内の銭湯と期間限定でコラボして高い注目を浴

びるなど、風呂上がりに強炭酸といったアプローチにも手応えがあった。驚くことに、当社調査で炭酸水の飲用率が約50%ということからも、将来のチャンスは非常に大きい。日本発、世界初、史上最高の高ガス圧を実現した強炭酸サバー「EXTREME BURST」の展開(4月から)や、炭酸水の力を解き明かした「アサヒ炭酸ラボ」といった研究や、CO₂を食べる自販機の開発などを通じ、アサヒとしてのブランド価値向上にも取り組んでいる。

また、食品事業も「ミネティア」が牽引して前年を超えている。主なものを挙げると、主力アイテムが好調だったことに加え、6月発売の「ワンピースコロパッケージ」の出荷が寄与した「ミネティア」が131%、多食形態が好調だったアマノフーズのみそ汁が101%のほか、ペビーフードが前年並み、シニア向け食品が103%(いずれも金額)となっている。「フリーズドライは値上げ以降、苦戦していたが、ようやく戻りつつある。コロナ禍の影響をまともに受けたミネティアは、リリース」が好調で、すでにコロナ前の水準を上回っている。ほか、ディアナチュラも堅調。粉ミルクは原料高に苦心させられたが、どうにか確保できて回復基調に転換。ペビーフードでは、ベトナムでの産官共同の取り組みも進んでおり、新たなステージに向かっている。さらに、国内で新たに酵母エキス向けの酵母の培養を開始し、酵母エキスの生産を拡大するなど、食品事業トータルで堅調に推移している」と濱田社長。「アサヒグループジャパン設立当初に比べ、将来あるべき姿の共有化やグループ・シナジーも進んでいる。唯一無二、One・Asahiとして、目指す姿である、なくてはならない酒類食品総合企業への歩みは着実に進んでいる。上期はこのペースで折り返せるだろう。各事業でこの良い流れを、より確かなものにした」と締め括った。(石母田主幹)